

FD ニュースレター

Health Sciences University of Hokkaido

北海道医療大学FD委員会

FD News Letter No. 5



■第2回FD合宿研修を実施

特色ある教育の強化 ～地域社会連携教育の推進～

看護福祉学部 FD委員会委員 森田 勲

昨年度のFD合宿研修は、学部の壁を越えた全学的教育連携に焦点が当てられ、「北海道医療大学をめぐるニーズ」、「科目名と目標の設定」、「方略 授業設定」、「評価」、「北海道医療大学を卒業したというアイデンティティ」をもたせる授業-柔軟なカリキュラム改革体制」と5つのワークショップに分けて行われた。本年度は、本学が平成15年度の文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」において特色ある教育を実践している大学に選出されたのを受け、組織的な取り組みとさらなる強化を趣旨として、「特色ある教育の強化-地域社会連携教育の推進」をテーマにプログラムが進められた。

参加者はプロデューサーの廣重 力学長をはじめディレクターとして阿部和厚、タスクフォースとして横井寿之、有末 眞、千葉逸朗、塚越博史、吐師通子、長濱亜希子の各教員、各学部から集った教員46名および世話役として事務・飛岡範至さん、中村正人さんであった。

グループ作業のテーマは1) 導入教育(フレッシュマンセミナー)、2) 共通科目、3) 医の倫理、4) コミュニケーション、5) 学生参加型授業で、これらの科目設計を通じて教育を多面的に捉え、ボランティア、現場・地域・社会連携をいれた授業科目を構築できるように配慮がなされた。タスクフォースによる課題のミニレクチャーに続き、グループ作業-全体発表-討論という流れが分刻みで繰り返された。

最初のワークショップでは、本学の教育理念を踏まえ、「北海道医療大学をめぐるニーズ」というテーマに対し、教育理念を具体的にアピールするための社会的ニーズをKJ法によって図式化するという作業が与えられた。発表役やまとめ役などの役割決定にはじまり、グループ内での貢献度が試される最初の機会であったため、戦々恐々とする場面もみられ

た。また、限られた時間の作業であったため、各自の考えをカードに書き合っ、島をつくりながら整理するというKJ法はグループ学習の導入として、また、創造性を高めるための良いトレーニングとなり、その後の展開に良い影響をもたらしたように思われる。

その後、2つのワークショップを消化し、各自の持ち寄りによる「ほろ酔い懇談会」が行われた。ここでは、「授業評価の公開・非公開」に関するディベート体験が企画された。アルコールが入ったプログラムとなったため、それまでの緊張感が解けたせいもあり、最初は少し重たい空気が漂っていたものの時が進むにつれて活発なものとなった。そして夜を徹しての懇親が各宿泊室や懇談会場で行われた。2日目は午前8時30分から再会され、「評価」、「北海道医療大学の特色をうちだす授業」の内容でワークショップが進められた。それぞれのグループが企画書形式で特色ある授業の提案を行い、自由な発想でユニークな発表となった。ポストアンケート、バスの中での感想談義をもってまとめのプログラムが終了された。研修の冒頭で廣重学長が研修のプログラムを「フルコースのフランス料理が用意されている」と評され、場合によっては自分なりの判断で腹加減を調節するも良しとの旨の「激励」がなされた。研修が進められる中で、全部平らげるところか、さらに充実したフルコースを創造しようという機運もみられたように思う。いずれにしても参加者はもとよりタスクフォースを始め多くの参加者の熱意の伝わる研修であった。



研修会場到着後、さっそく全員で記念撮影（まだ余裕の笑顔でしたが・・・）

平成15年度北海道医療大学FD合宿研修に参加して

看護福祉学部 花澤 佳代（Aグループ）

今春より赴任したばかりの私にとって2日間の研修で一番の成果は、他学部・他学科の先生方と交流できた点です。他学部・他学科の状況や考え方を伺い、北海道医療大学という組織の中で、協力して「よりよい教育」を考えていくという方向性を持つことができましたと考えます。

研修では限られた時間で全学部共通の特色ある講義の検討を行いました。やはり所属する学部・学科によって、学生の状況や関わり方、教育の目的などが微妙に異なっているので、その違いや特徴を整理する必要があると思いました。学生のニーズに沿った、大学の特色を出せる教育を考えるためには、

互いの学部・学科の特徴や教員のスタンスの理解が重要だと考えます。自分本位のカリキュラム作りにとどまらず、講義において相互の連携が図られシラバス作成が可能になれば、教育効果が高まるのではないのでしょうか。その上で、地域社会と連携した教育の実現が求められていると思います。



FD研修を終えて

2日間のハードで、刺激的な研修が終わりました。このグループは、予想外に、まじめな「常識人」の集まりでした（もちろん、他のグループに比べての話です）。

さて、大学教育は、これまでの、理論一点張りの教育（学問の府）から実践的な教育（専門職業人の育成）へと変革を迫られているわけですが、「理論と実践」（学問と現場）は、対立する概念ではないはず。対立しているのは、「人間」です。おそらく、「学生さん＝消費者」という視点が、これからの大学を変えていくのではないかと。そんなことを改めて考えさせられた研修会でした。研修会での熱い議論が、「現実の改革」にどうつながっていくのか、大いに期待されるところです。

薬学部 久々湊 晴夫（Bグループ）

なお、これからは、リクリエーションを兼ねた楽しい研修会（教育フォーラム）が、学部ごとに自主的に開催されていくことを望みます。



感想

医療大学という包括的な名称を有する本大学ですが、各学部教員の間でも十分な連携、理解があるとは言いがたく、その状況のなかで、本研修会は、これをわずかながらでも補う役割を果たしていると感じました。その内容には、今まで経験したことのないものも含まれており、参加したことで多くの情報をうることができたと感じています。ただ参加者の当日の感想の中にあつたように学生参加型の授業を1つの授業形態として例示されたのとは裏腹に、本研修会では、企画側と参加側が双方向的な流れを有していたと感じた参加者は少なかったかもしれません。今回参加し、本学教官が、FDに優れた知識と技能の潜在能力を有していると確信できました。ですので

看護福祉学部 中川 賀嗣（Cグループ）

今後より効率的、発展的な会が、持たれ、さらに全教員が1度は参加するようになるよう願っています。



感想

【パート1：何が始まるんだろう？】

一般に、知らない世界に行く場合、「不安と期待が入り混じって」などという表現が使われますが、小生の場合、不安と帰宅願望のみが先行し、しかも参加させていただいた動機も積極的なものは何もなく、先輩教員に「行って来い！」と命ぜられた新米教員なのでありました。

ただ、バスの中では看護学科の平（ひら）典子先生が優しくしてくださり、それがせめてもの救いであり、ありがたく感謝しつつ、会場の「ないえ温泉ホテル北乃湯」に到着したのです。

【パート2：素晴らしい出会いに感謝】

F D合宿に参加なさった他学部の諸先生につきましては、みなさん素晴らしい方ばかりで、この出会いに心から感謝いたします。

とくにわが「Dash Group」は、小生以外のメンバーが、博学多才、威風堂々、眼光炯々、完全無欠、気宇壮大、深謀深遠、清廉潔白、一騎当千の方ばかりであり、まさに多士済々でありました。これらの

看護福祉学部 石川 秀也（Dグループ）

人々が、合縁奇縁とでもいいでしょうか、意気投合をいたし、百家争鳴のワークショップが行われました。

浅学非才、無知蒙昧、胴長短足の小生を叱咤激励してくださり、最後まで和気藹々の中にお導きいただいたこと、衷心より深謝申し上げます。

【パート3：快い疲れが】

というわけでF D合宿も終わり、帰りのバスの中。また、隣席は平先生。きっとバスの中で居眠りをするであろうと思っていた小生は、平先生に添い寝をお願いしたのですが、爆睡していたのは平先生でありました。



感想

薬学部 田元 浩一、歯学部 鎌口 有秀、看護福祉学部 宮崎 みち子（Eグループ）

他学部の教官とのWSを通して、普段使っていない脳の一部を活性化することができ、有意義な2日間を過ごすことができましたが、また普段使っていない脳の一部を活性化したことが火曜日になっても抜けきらない疲労の最大の原因になっているのではないかと思います。とにかくこれまで自分で実施している授業法とは異なる方法を体験して、普段気にしているつもりで忘れていたような点を思い起こすことができたのは良かった点です。特に、決まった

時間に目的を達成すること、評価方法などの点で参考にできることがあったのは収穫でした。ただ、研修の目的や内容についての知識が殆ど無い状態での参加でしたので、その点があらかじめ分かっていたら取り組み方にも違いが出たのではなかったかと思えます。それと、研修の時期がちょうど忙しくなる時期の週末でしたので、もっと時間的に余裕のある前期が終了した直後などの平日でしたら、心にも余裕が持てたのではなかったかと思えます。

今までは、大量の知識を一方向的に教える方法についてのみ、いろいろ考え悩んでいたことに気がつきました。もっと、学生の持っている潜在能力を引き出し、学生自ら学ぶ方法もあることを知りました。実際、今回のグループ作業で行ったことは大変印象に残り、なかなかわすれないことと思います。しかし、現実に限られた時間で、大量の知識をどう学生に学んでもらうかについては、自分自身ではこれから解決しなければならない問題として残った。

今回のワーク・ショップでは、本学の理念・目標を再確認し、与えられた条件に基づく授業の設計を試みる機会を得た。そこで、我がグループは、現在の学生（医療人になるものとして）に必要なことの一つと考える「マナー」に着目した。この点については、さまざまな意見や批判を頂いたが、このような反響は、「医療人としての実践的マナー入門」の学習が本学の学生には必要であることを裏付けるものとも考えられる。それは、この学習が、医療人として必要な感性豊かな人間性を育成する一つの機会となるからである。また、本学の特色をうちだす授業設計では、学生が個々に自分の関心事を楽しみなが

ら深められる学習「里山に遊ぶ」（第1学年で選択履修）を検討した。これは、専門分野の学習の基盤となり、専門職になるものにとり不可欠な学習法を提示する機会ともなる。このように、我がグループで検討した2つの授業、「医療人としての実践的マナー入門」および「里山に遊ぶ」は、人間性の育成や専門職を目指すものにとり必要な、関連科目として位置付けられよう。今後は、従来に増して、このような各科目間の関連性を考慮したカリキュラム設計を工夫していくことが我々の課題と考える。以上、3名による感想でした。



■授業アンケート

授業アンケートは何のためにするか

FD委員会 委員長 阿部 和厚

平成15年度後期から 新たな形の授業アンケートが実施されています。アンケートには、1) FD委員会これまで数年行われてきたもの、2) 学部独自で行ったもの、3) 新たな形のものなどが、同じ年度、あるいは前年度にと混在し、フィードバックされたものが、どれかわからないという混乱がありました。さらに、本年度は教員業績評価に総合点を記入するようになっていて、この関係がよくわからないという意見もありました。

ここで改めて説明します。異論もあるでしょう。また、過激と思われる発言となるかもしれませんが、

お許しください。

授業アンケートは、正確には「学生による授業評価」です。「私の授業を学生なんかには評価されてたまるか」という先生もおいでになり、「授業アンケート」としてあります。

以前のアンケート

以前の授業アンケートは、本学で最初ということで検討の結果、12項目で評価をする構造です。しかし、設問に種々の問題点がありました。ここでは

これを詳しくは述べませんが、シラバスに書かれているべきこと、授業のパフォーマンス、いくつかの学生の主観的総合評価などがまじっています。教員業績評価で求める総合点も適切ではありません。適切な設問もありますが、そのうち大きな問題は、「この授業内容はむずかしかった」でむずかし過ぎるものが5点となって一番高い評点となること、「この授業は自分にとって有意義だった」というのは授業の総合評価のことであり、「この授業に対する総合評価は良い」も総合評価です。さらに、何かを説明したかどうかを求めるものもあり、これも問題で、これらの総合点（全項目の評点の平均点）を取ること自体に矛盾があります。総合点がおおむね授業評価を表してはいますが、これらの問題、矛盾が明らかなどころでは、教員間の比較としては使えません。

「授業評価」の総合点は、授業の種類（講義か、演習か）、学生数（大人数か小人数か）、必修か選択か、学問分野（もともと難しい内容を身に付けることが求められる科目、理論的思考が求められる科目、ある世界を知る教養的科目）などで大きく異なります。では、点数は比較の指標にならないかという点、そうでもありません。同様の科目、同様の専門分野では、上記のことを考慮して充分比較できます。

新しいアンケート

新しいアンケートは、以前のアンケートの改善、多くの大学の例などを参考に、以下のように構造化しています。

最初に学生の自己評価の設問が3つあります。1) 出席状況、2) 意欲、3) シラバスの活用についてです。「学生にまず自分が先生の授業を評価する資格があるか」を厳しく問うてから、授業についての設問に答えるようにという意見もあります。学生にプレッシャーをかけようというわけでしょうね。さらに、極端なのは「学生の名前を書かせるように」という強硬な意見も結構聞かれます。「何を考えているの」と言いたくなります。名前を見てどうしようというのでしょうか。学生はどうとるでしょう。これでは正しい授業評価は得られません。

アンケートは、第三者が行うべきだとのもっとも

な意見があります。新しいアンケートでは、これを勧めています。ただ、まだ、すべての授業について、TAや事務職員がアンケートをとれる体制はできていませんので、先生方の良識にまかせていますが。

ここでの自己評価の設問は、授業内容の評価を解析する際に参考にするためのものです。

授業については、18設問あります。最後の設問は「価値のある授業であった。（総合的に良い授業であった）」と学生の主観的総合評価となっています。実は、総合評価は、1から17までの設問の評点の平均でわかるのですが、最後の設問はその参考にします。

1から17の設問は、1)シラバスについて2問、2)熱意1問、3)パフォーマンス（声の聞き取りやすさ・黒板の字の読み取りやすさ）2問、4)授業設計（重要な点を網羅しているか・難しい内容をわかりやすくしているか）2問、5)メディアの工夫1問、6)双方向性（理解度のチェック、学生参加の促進、学生の発言への対応）3問、7)速さ、難しさの適切性2問、8)適切な授業外学習の促進1問、9)授業の効果（学生の主観的評価：学問的興味の刺激、履修目的の達成度、発展性）3問からなっています。最後の3問を除くすべてが観察可能な客観的評価の設問となっています。欠けているのは成績評価の設問ですが、アンケートを授業中あるいは、試験前の授業の最後に行うということで入れていません。

「学生はシラバスをほとんど活用していない」という声があります。しかし、実は、授業評価は教員にとって評価されるべき事項を知ることにも意義があります。授業で一般に気をつけなければならない事項が羅列されています。シラバスは授業において最も重要なもののうちのひとつです。その科目がなぜ必要かが事前に表現されないのであれば、その科目は必要でないことになるでしょう。また、「設問が多すぎる」という声があります。確かに。だが、設問を少なくすると、各問の重さが大きくなり、しかも等価性が求められます。「自分の授業には、適当でない」という声もあります。すべての授業にふさわしいものはつくれません。授業で学生が最も意識す

るもの、学生中心の授業のあり方で求められるものなどを入れ、総合のなかで比重の大きいものを複数の設問にするなどの工夫をして、バランスをとっています。

各設問の評価で、自分の授業の内容を見直し、さらに1から17までの総合評点で総合評価を知ることになります。点は[1]から[5]までであり、[3]は中間、[3.5]以上はよい評価、4以上は大変よい評価となります。一方、3未満は問題です。授業の種類を問わず、改善が必要です。

学生の生の声ができる自由意見

以前のアンケートでは、最後に教員の指示により利用できる空欄が用意されていましたが、自由意見とは書かれていなかったため、学生の自由な生の声かとどきにくかった面があります。今回は、自由意見の欄を設けました。ここでの意見には、担当教員の心臓にぐさりとささる意見も少なくないと考えられます。プラスの意見をもらうのは嬉しいが、教員にとって衝撃ともなるマイナスの意見こそ大事にしたいと思います。マイナスの意見を素直に聞くことこそ授業改善に役立ちます。

何のために授業アンケートをとるか

授業アンケートは端的にいうと、授業改善が目的です。授業は学生のためにあります。授業改善は常に求められ、これには受け手である学生の意見が最も参考になります。「態度の悪い学生、出席の悪い学生の評価はあてにならない」という意見もよくききます。確かに、いい加減な評価をしている学生もいますが、これは標本誤差となります。だが、授業は数回うけると、アンケートは正しく評価できます。学生の意見は信用できないというところでは、教育は成立しません。授業は学生と教員の信頼関係で成り立ちます。信頼できないというなら、信頼回復から努めなければならないでしょう。

アンケートの結果を授業改善に反映させるには、その結果を各教員へ早くフィードバックすることが求められます。これまでフィードバックが遅かったという問題が指摘されていますので、できるだけ早

くできるシステムを検討中です。

ただ、結果の数値が、各教員のもののみでは、その意味がよくわかりません。他の授業も参考にしながら考える必要があります。これには全体集計と照らさなければなりません。集計には少々時間がかかりますが、できるだけ早く効率よくする方法、さらにわかりやすいフィードバックの方法も検討中です。要は、同じ設問でアンケートをとる目的は、自分の授業を客観化することでもあります。

授業アンケートの客観化には、授業アンケートの公表も関係します。集計、解析の結果は公開され、参考にできます。だがさらに細部の比較には、他の授業の各項目の結果も公開されていなければ、比較ができません。このような観点で、授業名も明らかにし、さらに担当教員の名前もわかる形で、結果の内容を公開している大学もすでにかなりあります。

また、大学基準協会でも、学生に公表されることは、新たな評価基準になっています。

授業評価の結果は個人情報か

授業評価の結果は個人情報であるという議論がありました。言葉をえらんで慎重に述べなければなりません。授業評価の結果は個人情報ではありません。

授業科目は、大学、学部での必要性に基づいて存在し、担当教員はその科目の目標を組織として到達するための人的資源です。科目は担当教員個人のものではありません。組織として、どのような授業が行われているかは、把握されなければならず、公開されることを受け入れないわけにはいきません。そのため、授業そのものを公開すること、授業評価の結果を組織としてとらえることには反対できません。授業が秘密のものであれば、授業の私物化であり、組織の一員として授業を担当することに何かの誤解があります。

授業改善のために、「他の教員の担当する授業を参観できるようにしてほしい」という意見もあり、大学によっては、すでにこれを取り入れ、さらに相互評価（教員による評価）も検討されています。

また、前述のように、授業改善は学生と教員の共

同作業であり、アンケートに答えた学生にその結果が伝わらないのも問題です。授業内容には、シラバスのみならず評価にも、受け手の学生、学費出資者への説明責任が求められます。たとえば、父兄から授業アンケート結果の公開を求められた場合、これを拒否する根拠はありません。公開できないということ自体が、問題とされます。

ただ、自由意見には公開がはばかれるものが実際にあり、公開には慎重な方法が求められます。

どのように使われるか

教員業績評価に授業評価の評点を求められ、授業評価の点数が、昇任人事や査定、任期制の根拠に使われるのではないかなど、さまざまな憶測がとんでいるようです。いまのところFD委員会と点検評価委員会との連携はありません。裏取引はないのです。これからは、評価はますます重要になります。連携は必要でしょう。まだ、接触はありませんが、教員評価委員会（ここでは仮称ですが。）から求められるならば、どうぞご活用くださいとなるでしょう。ただ、数値は授業の性格で大きく変わりますので、そのままランキングに用いることはできないことは理解していただくことになるでしょう。また、このための根拠を明確にするためにも、新しい授業評価では、授業の種類を多面的に把握し、解析できるように、各教員がこれを記入するようになっています。この結果は、各教員が担当の授業をアピールする根拠として活用できるでしょう。

教員業績評価に授業評価の評点を求められたことに、思わぬ効果がありました。授業評価への関心度が増したようです。どのように使われるかは、すで

に目的のところで述べました。さらに、ランキングには問題があるとしながら、評価の高い授業を知り、さらに互いに授業を改善していくことにも活用したいですね。本当に高い評価のものには、表彰制もあってよいと私は思っています。学生におもねる授業が出てくるといった意見もありますが、授業はパフォーマンスのみではありません。授業の目標が先に設定されていて、そこに到達することも求められます。設問をみるとわかりますように、学生におもねるだけでは、評点は上がらないでしょう。学生を信用してください。正しく評価します。評点が上がるような努力は評価したいですね。そして表彰制により、教育全体が活性化されるならよいと思います。とくに私立大学では、教育の質の保証は、大学の将来を左右するでしょう。

いずれにせよ、まだ、授業評価をすぐ査定に使う状況にはありません。その前に、さまざまな解析が必要です。

どうかこの大学をよくするために、授業評価を受けて、授業改善に活用していただきたいと思います。複数教員で担当する数回の授業でも評価を受けたいという意見があり、学期の最初にアンケート用紙を配布し、いつでも利用できるようにとしましたが、学期の終わりに失念していてアンケートをとれなかったという意見もありました。このあたりの対応も考えています。

以上、授業評価をめぐる、さまざまな誤解や思惑の飛び交う中で、多くをご理解いただく必要があるとの観点から、FDニューズレターとしては、長文となりました。

編集後記

今年度は、文部科学省の平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」に選定され、FD委員会が果たした役割も極めて大きかったと言えるであろう。2回目のFD合宿研修も無事終了し、新年度には初めての試みとなる「新任教員研修」が実施される。また、授業アンケートの分析内容など、今後取り組まなければならない課題が山積している。全ての教員が満足することは無理でも、各教員の力強い後押しで少しでも良い結果が導き出せるよう頑張りたい。(I・M)

発行日 2004年3月31日

発行元 北海道医療大学FD委員会

編集委員 阿部和厚、有末 眞、黒澤隆夫、○鈴木幸雄、高橋 大、東城庸介、土肥聡明、長田真美、中野 茂、○西 基、樋口孝城、溝口 到、○森田 勲、飛岡範至 (○発行担当)